

小さな美術館からアートと地域に新しい風を起こす

「はじまりの美術館」のはじまり

#07

築140年の蔵を改築した 猪苗代の小さな美術館

福島県耶麻郡猪苗代町の街角に小さな美術館がある。東日本大震災で損壊した築140年の古い蔵を改築し、2014年6月にオープンした「はじまりの美術館」だ。蔵は十八間蔵といい、元々は酒蔵、その後、会津木綿の縫製工場やダンスホールとしても使われたそうだ。明るく開けた前庭を通して入り口を入ると、中は、十八間(約33m)のどっしりと太い梁が通った重厚な造りが印象的だ。土間のカフェ&物販スペースから靴を脱いで段差のない展示スペースに進むと、木レンガ敷の感触が足の裏に心地よい。展示スペースは大きな窓から外光が入り、温かみのある木のインテリアも相まって、誰もがくつろいだ気持ちで過ごすことのできる空間になっている(設計:竹原義二/無有建築工房)。

福祉の世界から アートの発信、地域のハブへ

「はじまりの美術館」の運営母体は郡山市の社会福祉法人安積愛育園だ。館長の岡部兼芳さんは、以前は法人の施設の生活支援員として、障がいのある人の創作活動をサポートしていた。そこで利用者による独自性のある表現に出会い、「これは面白いな」と思いながらも、自分が美術の専門家ではないため、それをどう名付けてよいかわからなかったという。いわゆる“現代美術”とはいえないが、かといって、「障がい者の作品」と呼んでしまうと、狭義の福祉の世界の中に

左:展示スペースは外光も取り入れた快適な空間。床の木レンガ敷はワークショップ形式で住民も作業に参加
右上:「はじまりの美術館」の外観。この日は雪がちらついていた
右下:土間のカフェでは、地元で農業を営む若者がオフィスワークの合間にスタッフとしゃべる姿も
<https://hajimari-ac.com/>



閉じ込められてしまうからだ。

2000年代初頭、障がい者の芸術活動としての「エイブルアート」が注目を集めるようになった。その一環として始まった「トヨタ・エイブルアート・フォーラム」の福島県開催の実行委員を務めたことで、岡部さんは、障がいのある人の表現をアートとして言語化し、発信することができるかと確信。それから公募展に応募したり、グッズを作ったり、小規模な展覧会を開催するようになった。ただ、施設の中だけでは活動に限界がある。岡部さんは、「自分たちで運営し、創作の環境が整ったアトリエ&ギャラリーがあるといいね」と周りの人と話していた。

当時、海外では、「アール・ブリュット」への関心が高まっていた。これは日本語で「生(き)の芸術」と訳され、フランス人画家のジャン・デュビュッフェが提唱した概念だ。障がいの有無に限らず、正規の美術教育を受けていない人の芸術であり、伝統や流行、教育などに左右されず、自身の内側から湧き上がる衝動のままに表現した芸術のことを指し、日本のアーティストにも注目が集まった。2010年にはパリで大規模な美術展「ア

ール・ブリュット・ジャポネ」が開催され、63人の作品600点余りが展示され、12万人を超える観客を動員した。その出展作家の中に安積愛育園に通う伊藤峰尾さんもいた。

このことをきっかけに、日本財団のアール・ブリュット支援事業の一環として立ち上げられた美術館構想会議に名乗りを上げ、地域の失われてはいけない街並み保全と福祉とアートの連携を目指すプロジェクトの5件目として、猪苗代の十八間蔵を使った美術館が造られることになった。

その後、東日本大震災により、美術館は福島の震災復興の地域のハブという役割も担うことになる。安積愛育園が事業主として、日本財団と現代美術家の村上隆氏が主宰するカイカイキキによる復興支援基金の助成を受け、2014年、岡部さんが館長となって、「はじまりの美術館」がオープンした。「アール・ブリュットの美術館」という枠組みでのスタートではあるものの、当初からアール・ブリュットに限らず、多様なアーティストの作品をテーマに合わせて紹介する企画展を中心に運営されている。

Sachiko Takenouchi

(株)シナリオワークにて女性消費者を中心とする消費者研究、マーケティング戦略立案を多数手がける。
2015年4月、自宅を改装し、シェアハウス&シェアキッチン『Okatteにしおぎ』をオープン。
(株)コンヴィヴィアリテ代表取締役。

展示を見るだけではない、 アートを通じた「はじまり」体験

#02

ユニークな体験を 得られるイベント

「はじまりの美術館」と筆者の出会いは2023年8月、「はじまりの美術館」で行われたイベントだった。全盲の美術鑑賞者・白鳥建二さんと企画展の作品数点をグループで鑑賞するというものだ。最初は見える人が見えるものを見えない人に説明するという体だった鑑賞が、次第にそこから派生するイメージを膨らませる会話の場となった。さらに、美術館スタッフからの創作の背景情報も加わることで、作者への思いを馳せる場もなった。その時鑑賞した作品は障がいのある人の作品だったが、障がいのあるなしにかかわらず、作品との新たな出会いの場が生まれたことが印象的なイベントだった。

この企画展では、NPO法人ぶるすあるはによる「こことからだコンディションカード」(きもち、体、心の調子などが描かれた、コミュニケーションを促すカード)の白紙のカードに自分の今の気持ちや状態を書く企画や、コラージュ・造形作家の渡邊のり子さんの展示に合わせて、5cm四方の白い箱を使い「自分だけの物語の箱をつくらう」というワークショップも実施。単に作品を鑑賞するだけではない、まさにそこから何か「はじまる」工夫が凝らされていた。

すべてを一から 作り上げる企画展

こうした企画展はすべて、館長をはじめとする美術館のスタッフが、企画立

案、作品借り受け、搬送、展示作業まで含め、一から自分たちで作り上げている。福祉畑から館長になった岡部さんのほか、学芸員の大政愛さんは2016年に美術系の大学院から新卒で就職、企画運営担当の小林竜也さんはホテルのシェフから転職と、それぞれ異なるバックグラウンドを持ちながら、この美術館に関わるようになった人たちだ。

岡部さんは、今も自分たちは「美術館ってなんだ、とずっと手探りを続けている状態」という。しかし、だからこそ「全国津々浦々まで行き、実際の創作現場や作品に触れる機会を積み重ねることにより、作者の創作の感覚を自分たちで共有することができ、最近は企画にちょとした遊び心を忍ばせる余裕もできてきた」。その“遊び心”は筆者が体験したイベントでも感じることができた。

遊び心の一端を担っているのが学芸員の大政さんだ。大政さんは美術館に就職した頃から、来館者が主体的に参加できる体験型の仕組みや作品を取り入れ

る試みを始めた。「展示も含め、アートを好きな人、美術の文脈を知っている人には新しい切り口を感じてもらい、アートに触れる機会があまりない人には敷居を低く、親しみを感じられるようにしたい」と大政さんはいう。

現在行われている「第7回福島県障がい者芸術作品展 きになる≡ひょうげん2023」でも、審査員による賞のほかに、展示されている作品の中から来館者それぞれが「きになる」作品を選んで投票し、「オーディエンス賞」を決めるという催しが行われている。来館者は展示をただ見て歩くだけでなく、自分にとって気になる作品を選ぶという行為によって、作品が自分に引き寄せられ、自分にとっての「きになる」について考えるきっかけを与えられる。

いわゆるバックヤードのない「はじまりの美術館」では、受付やカフェでスタッフと来館者が気軽に話をし、“フラットにお客さんと出会い”、その声を直接受け取ることができる。大政さんは、美術館を出ていく人たちが「楽しかった」「また来たいね」と言うのが聞こえたときこそ、美術館員としての醍醐味を味わえる瞬間だと語ってくれた。



左上:「はじまりの美術館」のスタッフの皆さん。左が館長の岡部兼芳さん、右から企画運営の小林竜也さん、学芸員の大政愛さん
左下:企画展「物語ることも、物語らないことも、物語れないことも」でのワークショップで来館者が作った自分の「こことからだコンディションカード」
右:安積愛育園の利用者の創作活動支援プロジェクトunico(ウニコ)の作品アーカイブ「はじまりアーカイブ unico file」。作品レンタルや画像使用も受け付けている
<https://hajimari-archives.com/>

「はじまりの美術館」は地域のハブでもある

#03

「寄り合い」で地域住民が美術館を育てる

「はじまりの美術館」は、アートと人との新たな関係性が「はじまる」場所としての役割に加え、地元の街並み保全や東日本大震災からの住人の心の復興促進のための「地域のハブ」という役割も担っている。そのために美術館の準備段階から行われてきたのが、地元の人々を主役とする「寄り合い」という会合だ。

新しい施設ができることに多かれ少なかれ期待と不安を持つ地元住民に対して、通常は事業者による住民説明会が行われる。しかし「はじまりの美術館」は、「寄り合い」という名前でのワークショップを行った。コミュニティ・デザイナーの山崎亮氏に参加してもらい、美術館でどのようなことをしたら楽しいか、美術館があることで猪苗代がどんな場所になっていったらよいかについて話し合い、猪苗代のよいところを見つける

街歩きツアーも開催。それによって、住人みんなでワクワクを共有し、自分たちの場所としての美術館を育てていく機運を醸成していった。

「寄り合い」は開館後も定期開催され、そこから幾つかのアイデアが形になった。その一つが「猪苗代あいばせMAP」(「あいばせ」とは、会津弁で「一緒に行こう!」という意味)だ。開館当初、来館者は美術館を訪れただけで、まっすぐ帰ってしまうことが多かった。この状況に、ただ美術館に来るだけではもったいない、せっかく猪苗代に来たのだから猪苗代を回ってほしい、と、「寄り合い」メンバーの女性2人がイラストとデザインを引き受け、街歩きマップを作った。街の名所やおいしい店、年間のイベント、猪苗代についての住人のおすすめコメントなど、作り手の猪苗代愛が溢れるマップに、来館者も街を巡ってみようかという気持ちにさせられる。

「寄り合い」から生まれたイベントもある。

毎年6月の開館周年記念に美術館の駐車場を中心に開催される「はじまるしえ」だ。猪苗代町からさまざまなお店が出店、館内のカフェでトークイベントや映画上映会、町内の折り紙名人によるワークショップなどが行われる。その運営には「寄り合い」メンバーをはじめとする地域の人が多数参加する。

そのほかにも、美術館の周りを緑でいっぱいにしてと野芝を貼ったり、チューリップを植えたり、あじさいの挿し木をしたりといった活動や、しめ縄作り、書き初めなどの季節の行事のワークショップなど、美術館のイベントを地域の人と一緒にやる機会は多く、いろいろと助けられているようだ。

美術館が「自分たちの場所」になる

岡部さんは『ボランティア』ということばが、単に手伝ってもらおうという感覚から、自分がやりたくて、楽しんで、一緒にやるということが真ん中にある、本来の意味に転換していくことを感じているという。コロナ禍で「寄り合い」の定期開催ができないままになっているといった悩みもあるそうだが、用がなくても地元の人がやって来てお茶を飲み、仕事をしたりスタッフとおしゃべりをしたり、カフェで地域の人同士や地域の人と美術館を訪れた遠方の人が出会い、そこから新たな企みが生まれるといったことが日常的に起こる。もはや「寄り合い」以外の場面でも美術館が地域に溶け込んでいることがうかがわれる。

岡部さんは、『「はじまりの美術館」はアートと福祉を起点に、これからも“これをやっていけばよい”という型にはまることなく、常に一から手作りをしていく、どこまでも“はじまりの”美術館でいきたい』と語った。



左:「寄り合い」メンバーが作った「猪苗代あいばせMAP」には、住民しか知らない情報も盛りだくさん
右上:毎年6月に催される「はじまるしえ」には地元のお店が数多く出店する
右下:寄り合いの様子。冬はこたつを囲んで

